



# ナノスケール歪場による半導体ナノ構造の発光特性制御の基礎的研究

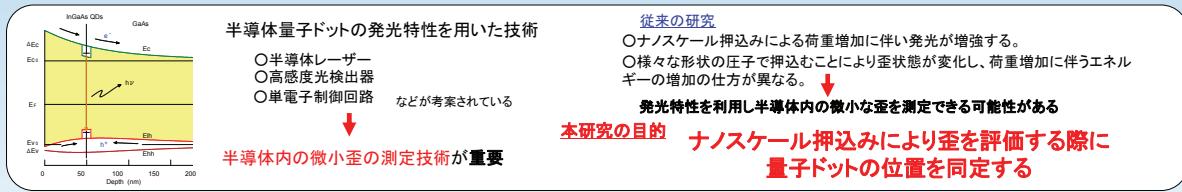


荒居善雄(埼玉大) , 尾笠一成(理研), Liang Yuanhua (埼玉大院)

Saitama University, 255 shimo-ohkubo, sakura-ku , Saitama , Saitama 338-8570, Japan

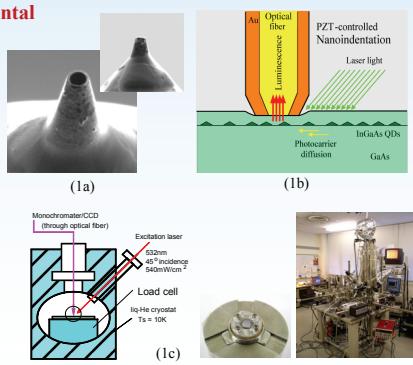
The Institute of Physical and Chemical Research (RIKEN), 2-1 Hirosawa, Wako, Saitama 351-0198, Japan

## Introduction

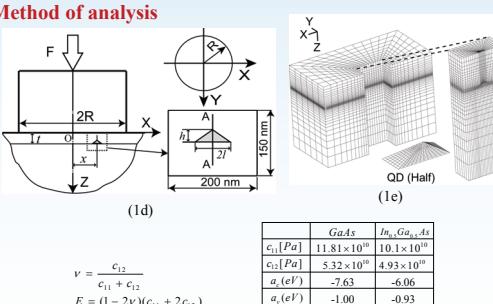


## Method

### Experimental Set Up



### Method of analysis



### Six-band Hamiltonian

$$H_6^{\pm} = \epsilon_{\pm}(x_{\pm} + c_{xz} + c_{yz}) - S \quad P = -S \quad R = 0$$

$$P = -S \quad P = Q \quad R = 0 \quad Q = -R \quad R = -Q$$

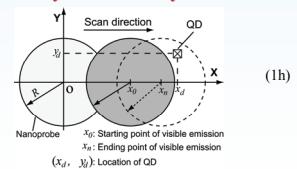
$$H_6^{\pm} = \epsilon_{\pm}(x_{\pm} + c_{xz} + c_{yz}) - S \quad P = Q \quad R = 0 \quad Q = -R \quad R = -Q$$

$$P = -d(x_{\pm} - c_{xz} + c_{yz}) \quad Q = R(x_{\pm} - d(x_{\pm} + c_{yz}))$$

$$R = \frac{d}{2}h(x_{\pm} - c_{xz}) - idx_{\pm} \quad S = -d(x_{\pm} - d(x_{\pm} + c_{yz}))$$

$$(1g)$$

### Coordinate system of analysis

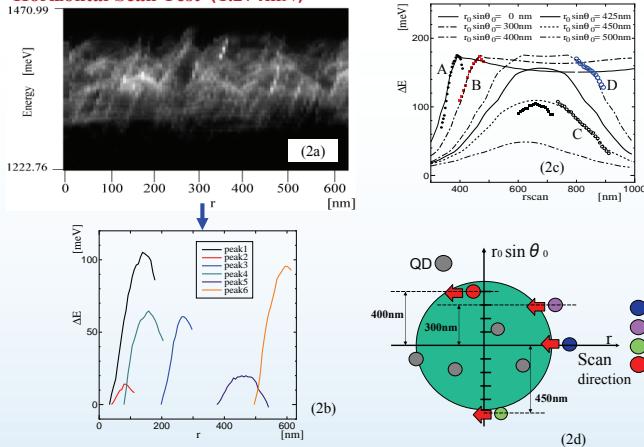


### Method of identification

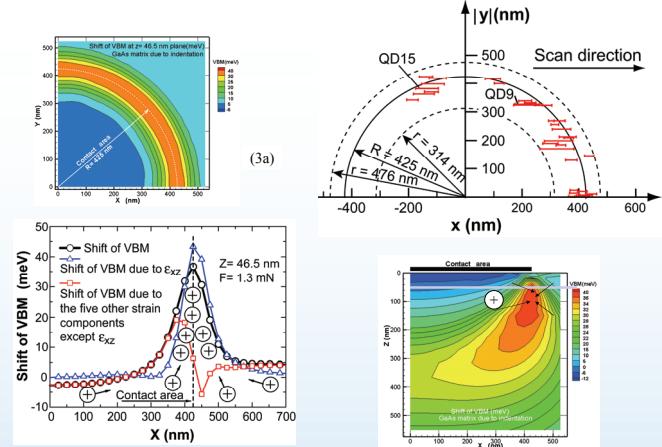
$$J = (\delta E_{\max}^{\exp})^{-2} \sum_{k=0}^n \left\{ \delta E^{\exp}(x_i) + \Delta E_0^* - \Delta E^{\text{sim}}[x_k; x_d^*, y_d^*] \right\}^2, \quad \min J$$

## Experiment

### Horizontal Scan Test (1.274mN)



### Hole concentration due to nanoprobe indentation



- 1) 圧子の位置が変化すると変化する距離に伴い、発光エネルギーは放物線のように変化し、最大 100meV程度増加した。
- 2) 実験結果(Plot)と解析結果(Line)の比較より、実験中に観察できた発光エネルギーの変化 Peak A は圧子中心付近、Peak B は圧子中心から約300nm離れた位置を通ったと予測できた(2c・2d)。
- 3) Scan試験結果から発光している量子ドットが通過した線と圧子の中心からの距離 $r \sin \theta_0$ が(2d)で示したように予測可能である。

- Scan試験結果に対して位置同定計算を行ったところ、QDの発光のほとんどは圧子の端部付近で観察できることが分かった。
- 解析結果からholeは圧子端部付近に全て集まっており、圧子中心付近では発光は起きにくいという結果と一致した。

## Conclusion

- x方向、y方向、エネルギー方向の3つの変数を持つ、最小2乗法を用いた位置同定方法を提案した。
- 圧子半径・荷重測定に伴う誤差の影響を考慮した時、30nm以上の精度で位置同定が可能なことが分かった。また、人為的誤差の影響は経験により誤差を無視出来ることが分かった。
- Scan試験結果に対して位置同定計算を行ったところ、QDの発光のほとんどは圧子の端部付近で観察できることが分かった。
- 解析結果から価電子帯は圧子端部付近で極大値を取り、holeは圧子端部付近に全て集まり、発光が強くなることが分かった。